私は私、アナタは私、私はアナタ。では誰がこの身体の私？

風華　桜鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は私、アナタは私、私はアナタ。では誰がこの身体の私？

【Ｎコード】
Ｎ９１６１Ｘ

【作者名】
風華　桜鈴

【あらすじ】
私は何も考えずただ時間の流れに任せて生きてきた。それなのに、私は消えた。私の体は私じゃない。奪われた身体。だから、今度は奪い返すの。だって、あれが私の体だから。あの子を許しはしない。少女とあの子の戦いが始まる。身体を巡って精神体は相手を食い殺そうとするのだ。あの子が私の中に居る意味は・・・。サイコホラー（だと思います）の始まりです。

奪われた身体（前書き）

普通に生きてきた少女に起こった身の上。
アナタはこの恐怖の連続に耐えられますか？
っていうほど怖くないです。（多分）

奪われた身体

ただ、此処にいたから、此処に生きているだけ。
それだけの意味しかなかった存在理由。
だけど、本当は違う。違うと思いたい。
思いたいけどそれ以上の意味が見付からなくて、誰からも必要とされてなくて、私は泣きたくなる。一生懸命生きている証拠を残そうとする。
馬鹿みたい・・・。
なんで人は一人なのだろう。
群れていても所詮個々の物体。生きている意味が・・・わからない。
生きるために頑張っている人がいる。
それなのに、私は生きる意味を見出せず、ぼんやりとした曖昧な生活をしている。
その頑張っている人と私の魂は同価格。なのに、不公平だね。
頑張っている人に詰られても仕方ないと思う。
そう思うのに、知らず知らず生きていたいと思う。死にたくない、と魂が叫ぶ。
死にたくない・・・。
死にたくなんてなかったよ・・・。生きていたかったよ・・・。
だけど、それは一瞬で消える灯火だったんだね。
私は此処から抹殺された。
私の生きる居場所が奪われた。
だから、どうなの？
また、こっちで生きればいい、そう思いたいのに思い出すだけで帰りたい。此処は私の居場所じゃない。
「返して、私の体」
手を差し伸べる。

私に。
私の体に触れたい。体温を感じたい。
アナタは誰？
「返して・・・それは、私の・・・」
呟きは私の口から発しているのに他人の声みたいだ。
「返して・・・・・・・・・」
欲しいなら奪いなさい。奪われなら奪い返しなさい。
そう、私の戦いはここから始まった。
あの子から奪還する。
私を・・・・・・。
許しはしない。
私の体を奪ったあの子を。

奪われた身体（後書き）

これからあの子と少女の戦いが始まります。どちらを応援するかはあなた次第です。ただ、判っているのは身体は一つしかないということです。

アナタは逃げますか？闘いますか？それとも・・・。

二話で少女の決意が現れると思います。それを読んでアナタは何を感じ何を思うのでしょうか。ワタクシは非常に興味があります。宜しければご意見ご感想などお願いします。（じゃないと暴走しちゃうので）

呪いの歌（前書き）

三人目の人も登場。そろそろ名前も明らかにしていかなくては。ゆっくりと覚醒させていきたいです。身体の所有権とかも・・・・・。

呪いの歌

鏡に映る少女、杏奈。高校二年生。
容姿は普通より少々可愛いかもしれない。
だが、そこに映る少女は艶かしい成熟された女性。その女性はゆっくりと男性が振り向くであろう優雅な歩き方をしてパジャマを脱ぎ捨てた。
成熟してない身体と成熟した妖艶な迫力がアンバランスで不気味だった。
それを杏奈は悔しそうに見ていた。
女性、が笑う。
杏奈の身体で杏奈の声で杏奈を嘲笑う。
「そんなに、この身体に執着しなくてもいいんじゃない？」
女性の言葉遣いは今風でまたアンバランスだ。
「それともこの身体はそんなに値打ちがあるのか？」
馬鹿にした笑いに杏奈は何もいえない。女の自信満々な言い方が凄く似合っていて杏奈が清純派ならそちらは女王様系だ。
杏奈は必死に叫ぶ。

カエセ、ソレハワタシノ身体、カエセ、カエセ、カエセ、カエセ。

「いやじゃ。身体は誰のものでもない。だから、この身体は我が頂く」
くつくつと笑いながら女は鏡に残酷に言い放った。

オマエハダレ？ダレナノ？
ナゼ、ワタシノ身体ヲ・・・。

「お前が、呼び起こしたくせに何をゆうか」

ウソダ。ワタシハナニモシテナイ。

「我が嘘を言ってどうする。意味なかろうに。愚かな娘じゃ。さっさと消えておしまい」

冷酷に私の声がエコーのようになり意識が遠のいていく。

ダメ。ワタシノ身体。

トリモドス。絶対ニ。奪イ返ス。

殺シテデモ・・・。

最終的には奪う奪われるの繰り返し。だったらどちらかを殺せばいい。

私ハ勝ツ――――。

誰ニモ渡サナイ。

漸ク・・・ニ・・・タモノ。

何？私は何を言っているの？

私は私じゃないみたい。

嘘よ。

だって、私は私だもの。

投下された不安が水面を揺るがした。

誰が誰なのか。

耳を塞ぎたい。目を閉じたい。何も知らないまま・・・で。

赦さぬ。主だけ逃げるのは赦さぬ。

皆で背負った業であろう。

購いは皆でするべき。逃げるのは・・・誰一人赦さぬ。

強い口調。今まで聴いたことのない凛としていて逆らうことの出来ない声音。

何度も揺さぶるかのように赦さぬと呪いの歌のように繰り返す声。

呪いの歌（後書き）

まだまだこれからサバイバルになるといいなあなんて。でも、まだ出てきてないキャラはいるはずです。（私も判らないのですが）
罪を購う・・・皆で購う。
何をやらかしたんだ！ってかんじです。

忘れた夏（前書き）

増えていく人格。
そして、あの夏を忘れた私。
あの夏になにがあったのか。

忘れた夏

赤い、赤い　どす黒い赤。

アレハ私ノ人形

赤く見えたのはアップで人形の布を見たから。
「主は人形が好きであったのう」
この間の人とは違う人。
まだ、私は私に戻れてない。
それどころかもっと人格が増えている。
どういうことなのだ。私は私ではない？今更現実味を感じさせられた私は今何処にいるのだろう。
「主はいつもいつも貧乏くじばかり引く。だから主の代わりを用意させたのだ」
だれもそんなこと頼んでいないのに。
「今はゆるりと休まれよ」

イヤ　イヤ　イヤ
ダッテ　ソレハ　私ノ身体ダモノ。

「さあ、眠られよ。我が主よ」

私が主だというのなら何故私の云うことを聞かないの！！
私の体は私のものなのに。

オマエガ　ソマツニ　アツカウカラダロウガ。
ボクタチハ　チャント　警告　シタノニ
ボクハ　オマエノ　行動ニ　アキレテイル。ダケド　マモラナケ

レバ　ボクモ　オマエモ

消えるのみ。

残すことなく身体だけ置いて此処から消えるしかないんだ。

イヤだ。

何で？私は悪いことしてないのに。

どうして？

アノ　ナツヲ　ワスレタノネ。

どんどん出てくる性格に私はもう驚かなかった。

夏に何があったの？

アノ日・・・　イイエ　ワスレテタホウガ　イイコトモ　アルワ。

教えて、私は何をしてしまったの？

「主よ、眠れ。今は眠れ」

強い声で言われて、暗示に掛かったみたいに自分がぼんやりとしてくる。

まるで自分が消えるようで怖かった。

あの　夏ニ・・・。

ナツ・・・ナツ・・・ナツ・・・ソウ、アノナツニ・・・私は・・・・・・・した。

途切れ途切れに思い浮かぶ光景。

オモイダスナ！！！！

はっきりと脳に聞こえるリンとした声。

ダッテ　私・・・。

オモイダソウトスルナ。ワタシタチガ　マモル！！マモルカラワスレロ！

忘れる？

なんて素敵な響き。

私はその声のおかげでゆっくりと意識を闇の中に溶けさせていった。

忘れた夏（後書き）

う～ん、短く終わりそうな終わらなそうな微妙な感じです。でも、夏に隠された事実を『私』は直視できるのか。
何故に人格が増えたのかもソコから繋がる・・・といいな。

赦しはしない（前書き）

少し間が開いてしまったためちょっと作風が変わってしまいました。
でも、最終的にたどり着くところは一緒なのでどうぞよろしくお願いします。

赦しはしない

――――アノ人ニ逢イタイ――――

私は暗い夜の森を獣のように走る。

月も星も出ていない森の中あの人のいるほうへと器用に走った。

私に光など関係なかった。ココは私のテリトリー。目を瞑っても走れる。

今日は風もそよそよと吹いているからあの人の匂いが風にのり居場所などすぐに判った。

辿り付いた時、私は・・・愛が憎悪に変わった。

――――――裏切り者――――――

私を騙した。

――――――赦サナイ・・・私ハ赦サナ・・・イ――――――

私が吼えると森中の獣達が応える。

森が震えるほどの遠吠えが続く。

村人達は森の主が怒っていると身を縮めて災いを避けようとする。

森の主の怒りに触れたのは誰だと罵りながらも。

その次の朝、村人達は息を飲んだ。

そこに誰も知らない少女が倒れていたからだ。

体中から血の香りを漂わせて。

森の使いだと村人は囁く。

捨ててしまいたい。
だが、森の主がそれを赦すだろうか。

村人の苦悩が始まった朝。
皆が顔を見合わせ誰が面倒を見るのか、自分は嫌だというサインを送りあっていた。

少女の睫が軽く揺れた。
開かれた瞳は血のような黒い赤だった。
開かれた口からは鋭い犬歯が覗いていた。

村人はひれ伏す。
どうか、怒りを静めてくれと。

その祈りが届いたのか少女はまた倒れ、眠ってしまった。
次に目を覚ました少女の瞳は皆と同じ茶色っぽい色をしていた。
だが、村人は警戒を解かなかった。それは正しい判断だったのだろう。少女は村人達から捧げられた食物を食べ、飲み、そして、にいっと嗤ったのだった。

「赦サナイ。赦シハシナイ・・・」

少女の声は森の主のもの。そして、その村を呪う言葉だった。

もう、生きていく術はない。
誰もが思った。
だが、数日後少女は突然消えた。

災厄から逃れた村人は喜んだ。それは悪夢の始まる合図だと知らずに。

それは私が私でなくなった証拠でもあったと私でさえ知ることを赦されなかった。

今、復讐の幕は開く。

あの人を追ってきた私の復讐が。それは甘美で私はうっとりとする。

――――――アト少シデ逢エル――――――

私だけの・・・

杏奈がハッと気付くともう夕方だった。
夢を見ていたような気がする。
でも、とても長くて嫌な夢。
ゾクッと背筋に寒気が走る。
赤黒い瞳が見えたから。
でも、夕日の光が壁に映ったからだった。
私は首を横に振る。

そう、もう始まっていたのだ。
あの日から・・・今まで
あの人が存在する限り今は遠い村人達にも災いが起こるのだ。
それを楽しむ僕がいることを私は知らなかった。

全部夢だと思っていた。

――――紅い紅い
血の色――――

僕が私に忘れさせたあの人への罪の警告。

赦しはしない。永遠に生きている限り。
僕はにいっと嗤う。
鋭い犬歯が覗いた。

恐れるがいい。
僕は、忘れはしないし赦しもしない
永劫に・・・

赦しはしない（後書き）

僕は誰を狙っているのか？村人達は恐怖におびえる。災いは始まったばかり。あの人とは誰なのか・・・杏奈の少女時代に何があったのか。杏奈も知らない罪と罰の世界。

狂気と歓喜

すたすたと大学内を杏奈は歩いていた。
この身体はいい、健康で若い。
そう品定めをしている杏奈の中の誰か。いい加減断ち切りたかった。

ウルサイ　ウルサイ　ウルサイ　ダマレ

何度も杏奈はそういっているのに相手は狂ったように笑う。
何で？どうして？杏奈は自分の身に起こった現象に戸惑いを隠せない。

私、おかしくなっちゃったの？瞳が潤んでくる。

アハハハハハ　赦サナイ　アイツヲ殺スマデ　僕、ワタクシは
貴方ノ中ニイル
アイツダケハ……。

あいつ？
何度も出ている単語。
誰？
私を混乱させているのはあいつなのね。

杏奈は少しずつ心が侵食され始めた。
こ……ろす。
「あいつを殺せば貴方達は消えるのね？」
杏奈がにぃっと笑う。

まるであいつのことを知っているみたいだった。刷り込み式に殺す相手を覚えさせられる。ちらつく映像は、紅い紅い黒に近い血の色だった。

杏奈は狂っていく。

殺すことが歓喜に変わる。

いつもの杏奈が変わっていってしまう。それを危惧して「だめ、耳を貸すな」と誰かが叫んだがもう、引き返すことができない。

「あいつをころす」

杏奈は無意識のうちに恍惚に呟いていた。

『ソウ　アイツハ　エモノ』

狩を楽しむように心の闇と杏奈はくつくつと笑う。

「　きだったのに」

もう一人の杏奈が叫ぶ。

――――――好きだったのに――――――

誰よりも杏奈はあいつを好きだった。

歓喜と狂気の中二人は叫ぶ。

それに呼応して獣達も遠吠えをする。

村でも森の中から空気が震えるぐらいに獣の咆哮を聞いていた。

村は恐怖に包まれる。
誰も入れないこの村にきた少年を思い出すこともなくただ恐怖に震えた。

あの時、あの少年さえ来なければ村は安全だったのかもしれない。
だが、もう昔のこと。
今は怒りを納めるよう祈るしか方法はなかった。

杏奈は狂気に取り込まれていく。

ダ・メ
アンナ・ダメ

必死の救出も杏奈には届かない。
もう一人の杏奈は子供のように泣きじゃくっていた。

好きなのに…と嗚咽の間に繰り返し言いながら。

あの時…あの場所で…カッ身体が怒りのため熱くなる。
「赦さない。あいつもそしてあいつも、だ」
杏奈は覚醒してしまった。

「だから、私は村を出たのだから」

背筋がゾクリとする低音で杏奈達は言った。

「恐怖に震えるがいい。神は許さないのだから」
空がいきなり真っ暗になり、やがて雨が降り出した。廊下で立ち尽くして見える杏奈の怒りを表すかのように雷がバリバリバリと近くに落ちた。

「ふふ、ふふふ……」

ああ、とうとうこの時がきてしまった。

嘆く声は雷に消された。

二人の杏奈

覚醒した杏奈は獣のようだった。
嗅覚が鋭くなり、視力もよくなった。そして何より、いつでも噛み千切れるように犬歯が鋭くなった。
野菜好きだったはずの杏奈は肉が好きになった。
友人達はその変化ぶりを何かに取り付かれたと思うように。杏奈はおかしくなったと噂が立つほどに。
その杏奈を見たがる人も増えた。教室に見に来るものも出てきた。
杏奈は睨み付けて威嚇をする。
その反応は怯えるものと喜ぶものの二つに分かれた。
杏奈は特に男をじっくり観察しながらいつでも飛びかかれるように唸る。

――――――――――――――――――――――――

僕らが守ってきた杏奈が……
壊れてしまう。
助けなければ。

救うものと堕とすもの。二つに分かれた意見が杏奈の中で激しく対立している。杏奈は堕ちていく。
あいつを殺さなければならないと思っているからだ。

もう片方の心が違うと叫んでいた。
でも杏奈は無視をした。
正気に戻る時間はごく僅かで何が起きているのか認識しないうちに、もう一人の杏奈が出てくる。

その日もそうだった。
いつの間にか自分の部屋にいて、きょとんとしている杏奈は頭痛を覚えた。その刹那、もう一人の杏奈が出て来る。
「お前の意識ごと喰らい尽くしてやろう」
二度と出てこないように、杏奈は杏奈を否定した。
最後の希望は潰えた。

喰らい尽くすといいつつ、檻に閉じ込められた杏奈はゆっくりと目を覚ます。
「何を、していたのかしら？」
頭がボーっとしていて、数日間の記憶がなかった。
思い出せない杏奈は自分の周りを見渡す。
真っ暗でザワザワと木々のなる音がした。
どこか懐かしい、森の香り。
「ここは…」
覚えている。
特別な場所。
見えないはずの景色が見えてくる。
大きな岩と祈りを捧げる村人。
変な事をしたらすぐ殺せるように、息を潜めている獣達。
獰猛な獣達に下がるように言い渡す杏奈。
なぜか、獣達は自分のいうことを聞くと確信していた。
そっと岩に触れる。
涙があふれた。
「父様。父様、私をここに閉じ込めるおつもりなのですね」
父様の嫁というのは詭弁で生贄だ。
もう一人の杏奈がここに自分を送ったのはそういうことだったの

だ。
精神体さえあれば父様の生贄になることは出来るのだから。でも、
杏奈はキッと岩に触れた手から嫁にはならないと拒絶した。
岩がゴゴゴゴゴと唸る。
村人達が恐れをなして何度もひれ伏す。
そんなことしても無駄なのに。
村が滅びようとも杏奈は関係なかった。
自分の人生を他人に取られて黙っているわけには行かないのだ。
檻など壊してみせる。

ようやく、杏奈は立ち上がる。
何が行われているのかは岩を触ったことで大体判った。
だからこそ今、立ち上がるのだ。

私の身体で人を殺すことなどさせない。
私の身体を取り戻す。

こうして、二人の杏奈の対決は始まった。
唸るもう一人の杏奈が受けて立つと、にぃと嗤う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9161x/

私は私、アナタは私、私はアナタ。では誰がこの身体の私？

2012年1月11日07時54分発行